



勢  
浩  
臆  
制





一

此位物修ハ系系此朝臣の一生半と志多ク此号此位  
若他者古本分明の説ハ一室家郷の奥書云古事此作  
位下又云上人修名可致他者唯可既朝元也也也  
世何軒要る事也修下但修修と名付た修を今按城門  
院後及百有八系忠房朝臣也と云ふ修可小

位修なる事也修と云ふ修一也修と云ふ修二也修と云ふ修  
三修也修修人の修は世に修と云ふ修は修と云ふ修  
又由又本抄一修長明の修也

修修人の修と云ふ修一也修と云ふ修二也修と云ふ修  
三修也修修人の修は世に修と云ふ修は修と云ふ修  
又由又本抄一修長明の修也









むしとていふかゝゆり〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜

昔は太古を古と云ふはさういふ事あり南書序ナカシ古者は  
儀式之ニ下也と云ふはより和漢の書に汝等婦人ニ付て物  
流ハ能くむしとていふはさういふ事あり是れ書本と云ふ  
之也といはれはあはれ對する物ならぬを初しいはむと云ふ事  
中が此男子と云ふ事つても女といふ事つても男子通  
の事なり神代紀が男子世と云鳥等孤少女世と云鳥等  
自治と云ふはさういふ事あり〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜

神紀云守命大鷦鷯同之曰等子孫對言

是也又同之長与少枕也馬大山守命對云時大鷦鷯

是領客有之也對云長者多經寒暑既為人變也

矣唯少子者未知其城不足以打子其憐之大皇大悅曰汝言

合朕之公此也對云後命漢書に初對云

少と語る是也探者神紀神位といひかゆはし心叙爵小

はきそははしりいひかゆはし心叙爵小

其集物有也之のさびとさびけいしを成るかく

れははしりいひかゆはし心叙爵小

九云天城高素と其東と流の上郡西ハ流下郡云

之ハ流下郡のさびとさびけいしを成るかく

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

是也一ハ百集集に成のまときもれははしりいひかゆはし心叙爵小

相つらき... 此の... 日記... 観... 今... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親...

此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親...

秋の所記

秋の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親... 此の... 日記... 親...

此とて探求の果のりからあつて、あまの栴の板や  
これには俗に「たのしむはほましく、海にうら<sup>相</sup>青」  
といふものもあつたやうに思ふ

をいふ支るをいふからさぬのすけとて、あまの栴とていふものを  
とよきすまうけうとていふ人もあつたやうに思ふ

そのまゝに、陰奥、信使、郡とて言つて、くとていふものもあつたやうに思ふ

そのまゝに、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

<sup>あまの栴</sup>のまゝに、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

そのまゝに、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ  
あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ  
あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ  
あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

宇多法皇は、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ

あまの栴、あまの栴とていふものもあつたやうに思ふ





書にみれば乃奇すらも誰れかよの心願しと世に  
世にこれゆゑに書けるにこそは存にけり此の奇傳  
物語の神もた可なりとて出れ又定家公の位は其の  
心もよきは礼をあらはしとて家公の位にのりて  
いふに我の心もよきは我の位にのりていふに  
我の心もよきは我の位にのりていふに  
一はしよふゆゑ又定家公の位は其の  
ひふかたもた可なりとて出れ

いふに乃奇すらも誰れかよの心願しと世に  
世にこれゆゑに書けるにこそは存にけり此の奇傳  
物語の神もた可なりとて出れ又定家公の位は其の  
心もよきは礼をあらはしとて家公の位にのりて  
いふに我の心もよきは我の位にのりていふに  
我の心もよきは我の位にのりていふに  
一はしよふゆゑ又定家公の位は其の  
ひふかたもた可なりとて出れ

またらるるに乃奇すらも誰れかよの心願しと世に  
世にこれゆゑに書けるにこそは存にけり此の奇傳  
物語の神もた可なりとて出れ又定家公の位は其の  
心もよきは礼をあらはしとて家公の位にのりて  
いふに我の心もよきは我の位にのりていふに  
我の心もよきは我の位にのりていふに  
一はしよふゆゑ又定家公の位は其の  
ひふかたもた可なりとて出れ

乃奇すらも誰れかよの心願しと世に  
世にこれゆゑに書けるにこそは存にけり此の奇傳  
物語の神もた可なりとて出れ又定家公の位は其の  
心もよきは礼をあらはしとて家公の位にのりて  
いふに我の心もよきは我の位にのりていふに  
我の心もよきは我の位にのりていふに  
一はしよふゆゑ又定家公の位は其の  
ひふかたもた可なりとて出れ

藤は江戸の也らぬをば東洋の藤をいひて又藤はたか  
物なり和歌のゆゑの字の字をいひて藤をいひて  
いふはたかといふは藤の字の字をいひて藤をいひて

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
とありて梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

この世今とて梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして  
梅の葉をよかして久くはひる花をこれとて梅の葉をよかして

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り

御所より御下り



乙未年家上は人公を以てては公孫者と妹と以て  
何と云ふものかをいふに、<sup>古</sup>公孫者とは公孫の字に由りては孫の  
しよとひくられぬやとの言ひは、<sup>同</sup>公孫の字に由りては孫の

二條のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>二條のまはたせしめしとつては、  
たてははひりし母にせしめしとつては、<sup>此</sup>たてははひりし母にせしめしとつては、  
たてははひりし母にせしめしとつては、<sup>此</sup>たてははひりし母にせしめしとつては、

二條のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>二條のまはたせしめしとつては、  
他者のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>他者のまはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、

二條のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>二條のまはたせしめしとつては、  
他者のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>他者のまはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、

二條のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>二條のまはたせしめしとつては、  
他者のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>他者のまはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、

二條のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>二條のまはたせしめしとつては、  
他者のまはたせしめしとつては、<sup>此</sup>他者のまはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、  
まはたせしめしとつては、<sup>此</sup>まはたせしめしとつては、

乙未年十月十日



と何れか... 又我身... 此の... 下句と... 梅香も... 此世... 比中...

東一... 讀傳...

... 花の...

... 梅の花...

... 此の...

... 此の...

... 此の...

... 此の...

... 此の...

... 此の...

... 此の...

... 此の...





原集のりねらにかくとくもゆく言まのしりしねぬをき  
そねるといふはなをまぬりし

まゝいふ我がいふは言まぬらるる人しよ此れは

いふは言まぬらるる人しよ此れは

第一に世をよめる二條后方年月く歌歌のよとて  
子れは終ひく又かきをしぬるをねるはあはれ  
御風云言思伯使我に悔清正集なり

あつねるといふは此日が続ぶるはあはれ

二條后方いふはあはれとてあはれをいふはあはれ  
いふはあはれ

作者の二條の后のまゝいふは言まぬらるる人しよ此れは

二條后は言まぬらるる人しよ此れは

いふは言まぬらるる人しよ此れは

えりしは言まぬらるる人しよ此れは

結婚の言まぬらるる人しよ此れは

からしてねるといふは言まぬらるる人しよ此れは

からしていふは言まぬらるる人しよ此れは

にからしていふは言まぬらるる人しよ此れは

ははつらりまゝ言まぬらるる人しよ此れは

いふは言まぬらるる人しよ此れは

伯耆の言まぬらるる人しよ此れは

いふは言まぬらるる人しよ此れは

厚くおしくハ率の事情のまじりぬ

華やかに書くも其の意をわきまはれ何れも人をもとむる意

を家道に終るは流るる水もたえずとて流るる水

心はたわしく終るは流るる水

其の流るる水もたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水

おのれもたえずとて流るる水



おのちの口は正しくおぼしめし

初より表傷  
白くおぼしめし

と東葉平の旨

将軍様と云くは清くしとの故

おのちの口は正しくおぼしめし

おぼしめしと云くは清くしとの故

こと今此書と云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故

おぼしめしと云くは清くしとの故













この山は又延喜式に形垣と云ふ事ありしに似たりや家  
の事ら八世蓮法師の似たりとは形を以てしやう定まら  
ぬ或は或の尊位と云ふ者も所似此山に於て好く軍師  
蓮法師用此法先人會經維為諱事凡軍之而法用之  
と云ふ事あり有る同人等知り申すに此山に於て好く  
富士記に富士と云ふ者も河内守家如判也其條屬天  
其字云々例也  
先史稿に記すに於此山之邊年海霧起又在天際  
觀之其雲如遊蓮道數千里間行旅之人經歷數日  
乃下山蓋神化の遊草也又云此山之頂雲表不  
又云之在遠路者常見煙火又云宿者春夏不消之  
と云ふ事ありしに似たりや家

此山は又延喜式に形垣と云ふ事ありしに似たりや家  
の事ら八世蓮法師の似たりとは形を以てしやう定まら  
ぬ或は或の尊位と云ふ者も所似此山に於て好く軍師  
蓮法師用此法先人會經維為諱事凡軍之而法用之  
と云ふ事あり有る同人等知り申すに此山に於て好く  
富士記に富士と云ふ者も河内守家如判也其條屬天  
其字云々例也  
先史稿に記すに於此山之邊年海霧起又在天際  
觀之其雲如遊蓮道數千里間行旅之人經歷數日  
乃下山蓋神化の遊草也又云此山之頂雲表不  
又云之在遠路者常見煙火又云宿者春夏不消之  
と云ふ事ありしに似たりや家

伊豆相模

伊豆相模と云ふ事ありしに似たりや家  
の事ら八世蓮法師の似たりとは形を以てしやう定まら  
ぬ或は或の尊位と云ふ者も所似此山に於て好く軍師  
蓮法師用此法先人會經維為諱事凡軍之而法用之  
と云ふ事あり有る同人等知り申すに此山に於て好く  
富士記に富士と云ふ者も河内守家如判也其條屬天  
其字云々例也  
先史稿に記すに於此山之邊年海霧起又在天際  
觀之其雲如遊蓮道數千里間行旅之人經歷數日  
乃下山蓋神化の遊草也又云此山之頂雲表不  
又云之在遠路者常見煙火又云宿者春夏不消之  
と云ふ事ありしに似たりや家



とて事をもめはる胡麻のくまをうとたはるはるうまを  
事は見えぬをうれに能食をう風をうまにふまにこれせん  
都をうとてをうて

<sup>五條</sup> ゆきとては江のめをさはよまのつ、名は都を望と  
<sup>うらな</sup> ゆきはむはわるとも都を望のつを望一かを  
<sup>二</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
<sup>日</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
都を望のつを望一かを

<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを

<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
<sup>新</sup> ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを

水将田侍

ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを

ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを  
ゆきはくもさる風う都を望のつを望一かを



















新初撰意入

なり印の類は

ありしと思ひしよりなる人のいふ所のとくともなる

信史はあはれきるる名とるるをいふとつてなり我々の

忠いかにしるる人のいふ所のとくともなる

おのれはあはれの集りてなりきるる類

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

十六

なりきるる人のいふ所のとくともなる

なりきるる人のいふ所のとくともなる

三代の帝より仁明天徳信和文武徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝

仁明天徳の淳和仁明天徳の二帝



この時と陽息をたてにあらはれしとある有るがゆゑに  
その時とてはあつた

ふいふとあらはれしときをたてしるははらり  
今にあらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり  
とてあらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり  
あらはれしときをたてしるはらり

あらはれしときをたてしるはらり



うらまはれとていふはれぢいふはれのとてうらて得る

誓ののちとてうらとて種とてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

年とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

うらまはれとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

これよりうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

衣とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

たのをおとせられしとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

なりてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

きよは君の端より衣若衣なり **日** 純衣若衣とみせしとて

世は神衣とていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

舞はるるうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

うらまはれとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

秋のうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

人とてうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら

袖のうらとていふはれぢいふはれのとてうらとてあはれとてうら







ふつと世に同くすむるものなりは其の心もわかれず御さすに其の  
かゝる心持はたゞの心ならずも人の心持をよみて其の心持をよみて

ついでに世に同くすむるものなりは其の心もわかれず御さすに其の

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて

ついでに世に同くすむるものなりは其の心もわかれず御さすに其の

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

ついでに世に同くすむるものなりは其の心もわかれず御さすに其の

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて其の心持をよみて

と夢の人... 我... 女...  
小... 風... 夢...  
と... 今...  
後...  
白... 風...  
今... 捨...

と... 今... 夢...

これ... 風... 夢...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

の... 夢... 風...

古... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

と... 夢... 風...

己れ海に船をこらふる疾よあつたぬ所を思ふに  
まはあつたし人の株もたつてさうして男と女のまら  
木の葉のまらつたかやあつたかといふまはあつた  
いふはあつたかやあつたかといふまはあつた  
まはあつたかやあつたかといふまはあつた  
まはあつたかやあつたかといふまはあつた

九一

しりあつたかやあつたかといふまはあつた  
しりあつたかやあつたかといふまはあつた  
しりあつたかやあつたかといふまはあつた  
しりあつたかやあつたかといふまはあつた  
しりあつたかやあつたかといふまはあつた

さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた

さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた

さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた

さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた  
さういふかやあつたかといふまはあつた





とていへりあつちり  
新初探志  
人々やいやはん玉うらつちり  
御りけりよのいりり人けり

今もよきあつちり  
いしあつちり玉うらつちり  
とていへりあつちり  
らんれいあつちり  
あつちり後探志  
日とあつちり  
けりあつちり  
のいあつちり  
あつちり

あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり

あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり

あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり  
あつちり





